

# 第41回全国ハイグリーン研修会開催

## 総合微量要素肥料ハイグリーン発売60周年

8月23～24日、ホテル東京ガーデンパレスにおいてエムシー・ファーマイコム㈱（以下MCFC）アミノ・ミネラルグループ主催の全国ハイグリーン研修会が開催された。北海道から熊本県まで全国22社のハイグリーンを取り扱う特約店が参加、報道・商社・メーカー関係者合わせて総勢72名となり大変盛況となった。本会でのトピックスを提供したい。今回の研修会ではハイグリーン販売60周年として第1日目の講演では「ハイグリーンの歴史と販売普及の歩み」と題してMCFC開発普及及本部の清水技術主幹より紹介された。ハイグリーンは昭和33年に、新日本油脂工業㈱が水溶性苦土12%



%保証成分の硫酸マグネシウム肥料（ハイグリーン）の粉状品として、東京都荒川区西日暮里の三河島工場にて生産開始された。翌年に小西安兵衛商店（現在の小西安農業資材㈱）と総販売契約を締結、本格的な販売が開始された。その後造粒技術が開発され販売増となり設備投資を敢行。昭和37年に北海道様似町のホクレン向け硫マグ製造工場を竣工、販売順調に進捗したことにより昭和38年に新日本油脂工業の肥料部門より独立し、東邦化学産業㈱が設立された。また、昭和41年常磐炭鉱閉鎖後の地域振興策として企業誘致活動がなされ、現在のいわき市にて小名浜工場が起工、後に東京三河島工場と北海道様似工場を集約し、小名浜工場に生産設備を集中して生産の一元化を図った。昭和48年に三菱商事全額出資のダイヤケミカル㈱が設立、平成20年に三菱商事グループの肥料メーカー5社統合により誕生したMCFCとなり現在に至っている。

ハイグリーンの開発者は明治29年生まれ薬学出身の村田米一氏（享年94歳）。開発当時から技術者として全国各地を精力的に普及活動に邁進した信念の人と呼ばれている。村田氏は農産物の生育に関与する多くの元素に注意を払い、それぞれの役割を十分理解し、バランスの取れた養分供給をすることが必要だと説かれた。開発当時は微量元素における知見や肥料における成分保証・登録が未整備であった時代に海外発の研究データを基に現在のハイグリーンが開発された。60年前にこのような考えを持たれて開発されたことは敬意に値すると言えよう。微量元素の概念が確立されていない当時に生産者に対して理解していただき普及することは至難であったことがエピソードとして紹介された。ハイグリーンの製造方法や保証成分は開発当時より未だに大きく変わりはないが、時代の流れとともに各年代において使用目的も変化しながら販売されてきた。昭和30年代は食糧増産や連作障害の軽減、微量元素欠乏症状の改善に呼応して主に増収目的として利用された。高度経済成長により昭和50年代からは農産物の規格や品質が求められる時代となり秀品率の向上、糖度の向上といった提案で品質の向上を、昭和60年代から現在に至るまでは国民の生活レベルが向上し人間の健康まで追求したコメの食味向上や野菜の栄養価向上を目的としてきた。近年では業務用向け農産物に対して棚持ち向上や規格内収量増等での投資効果の明確化、異常気象の対応策のひとつとしても実証データを積み重ねながら時代のニーズに合わせて商品の提案方法も変化してきたハイグリーンの歴史の歩みが紹介された。

2日目は体験講演として北海道特約店の株式会社丹波屋豊嶋常務取締役肥料部長様、株式会社ネイグル新潟の清田取締役農材部長様の発表がなされた。豊嶋常務からはハイグリーン拡販プロジェクトの活動について、実証データの収集と経済効果の明示を実践されている経験談が披露された。北海道では畑作物への推進、飼料作物へも増収や栄養価向上についての実証データを積み重ねながら販売を

（次ページへ続く）

(前ページより続く)

チャレンジされている取組は水稲中心に販売している他参加者の関心を得た内容であった。清田部長からは県内の主力作物である水稲向けに販売する創意工夫に富んだ生産者向けの提案方法や普及活動と水稲だけではなく圃場を借りて実際に畑作物を栽培し栽培方法の研究を実施する畑作物への普及活動等、販売戦略をご披露頂いた。

2日目の講演としてMCFC技術普及グループの中村グループ長より「ハイグリーンの必要性和販売ターゲットのご提案について」講演がなされた。ハイグリーン販売をする上で基本となる微量元素の必要性のおさらいとハイグリーンの特長、拡販に向けた具体的な提案がなされた。最後に山崎アミノ・ミネラルグループ長より基本に立ち返り販売するスタッフや生産者の皆様に微量元素の必要性や施肥効果を理解して頂く事、新規販売ターゲットへの取組をお願いし閉会となった。参加者からはハイグリーンの歴史を新たに知ることが出来た事、ハイグリーンを販売する同志との意見交換が出来て良かったとの声が聴けた。今後の当会の益々の発展を祈念したい。

---

## 21UK 会現地研修会 in 北海道（壮瞥町・留寿都村・洞爺湖町）

去る7月26～27日、北海道壮瞥町・留寿都村・洞爺湖町にて21UK会現地研修会が行われた。UKとは宇部高機能性商材の略称でオキサミドやキングコート等被覆肥料入り商材を取り扱う特約店による拡販を目的とした組織である。今回、特約店、事務局、エムシー・ファーティコム株式会社（以下MCFC）、当社合わせて26名の参加を得た。

現地研修では、エムシー・ファーティコム社の製品スーパーオキサミドが使用されているミニトマト（壮瞥町）、長いも（留寿都村）の試験圃場を視察することが出来た。まず、スーパーオキサミド入り肥料を用いたミニトマトの収量向上を目的とした圃場を視察した。試験区の方が旺盛な生育を示しており、過去の調査日の写真を見比べても、実付きが早まっているようだった。さらに実際に対照区と食べ比べさせて頂いたのだが、試験区はBrix糖度が対照区と比べて高くなっており明らかに甘みが強く、収量・品質ともに良い結果となっていた。次に、留



寿都村での長いもにおけるスーパーオキサミド入り肥料試験の圃場を視察した。試験内容についてはスーパーオキサミドによる施肥回数の省力および、不順な天候に負けない養分の安定供給の確認を目的として設営されていた。今年の北海道は6月～7月上旬まで曇天と降雨、低温が続いたことにより作物全般に天候不順が影響しており、試験圃場の長いものについても事前の調査までは蔓の伸長が緩慢となっており、平年作よりも生育の遅れが懸念されていた。今回の視察で見られた状況では7月中旬以降気温も上昇し天気が持ち直してきたせいも、草丈で130cm程度、葉色においては大きな差はなかったものの試験区の方が、やや対照区より生育が旺盛な株を多く見ることが出来た。長いもの施肥のポイントとして、元肥および追肥1回目時において窒素の施肥量を多くしてしまうと茎葉の過繁茂をまねき、いもの肥大が悪くなる。また、種いもからの養分が生長に利用されるのは定植60日後で1回目の追肥の目的は茎葉の充実を図る目的で施すのが一般的。また、2回目の追肥のタイミングはいもが肥大する時期に施すのだが、肥料の過多過晩施肥は成熟の遅れや、平いもの発生を多くすることがあるので施肥のタイミングと施肥量には注意が必要のようだ。今回の視察圃場では、スーパーオキサミドの利用により追肥の施肥作業の省力や天候不順にも強い安定した肥効の発現がねらいとなっており最終結果が楽しみな状況となっている。

翌日の研修は、北海道農業の概要について株式会社日の丸産業社 開地部長代理様よりご講演頂いた。その後、MCFC技術普及グループより視察圃場の概要とオキサミドについて説明がなされた。次回のUK会は、株式会社ネイグル新潟様の主催で新潟県にて行う予定である。（札幌支店）

---

今月は一回夏休みを頂きました。皆さんの夏休みはいかがお過ごしでしたか？残暑も厳しいですので、体調管理にはお気を付けてください。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>